

「江戸後期の政治史 ～意次と定信、そして『金さん』」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 意次と定信、そして「金さん」に秘められた真実

「物語や映画、あるいはテレビドラマに欠かせないものとは？」と問われれば、多くの皆様が「主人公」と思われるのではないのでしょうか。

確かに主役がいなければ話になりませんが、主人公が活躍するために絶対に必要なのが「悪役」ですよね。物語などの世界で、悪役が憎々しげに振舞えば振舞うほど、最後の場面での主人公の大活躍に、私たちは溜飲(りゅういん)を下げることができます。

数多くの歴史上の人物の中には、いわゆる「悪役」の扱いを受けている人々が少なからず存在しますが、彼らのなかには、現代の私たちによって、一方的に悪役と決め付けられてしまっていることが多いのも事実です。

例えば、江戸幕府の5代将軍である徳川綱吉(とくがわつなよし)も、生類憐(しょうらいあわれ)みの令などの政策が後世の人々に誤解されてしまったことから、結果として「犬公方(いぬくぼう)」という有難くもない別名で非難されるようになってしまいました。

そして、その綱吉と同じくらい、あるいはそれ以上に「誤解」されたがゆえに、江戸時代で随一の「悪役」というレッテルを貼られてしまった人物こそが、今回紹介する田沼意次(たぬまおきつぐ)なのです。

田沼意次という人物ほど、時代劇で悪役扱いされている人物はいないでしょう。その理由はズバリ「賄賂(わいろ)政治」と呼ばれた彼の一連の政策であり、賄賂によって特定商人と結託し、私腹を肥やすという政治の腐敗(ふはい)によって、名もなき庶民(しょみん)が苦しめられる、というのが典型的なパターンです。

そんな折に、まさに「正義の味方」として現れる人物がいます。彼こそが松平定信(まつだいらさだのぶ)であり、定信は正義の力で意次を幕府から追放することに成功する(ドラマによっては意次が殺されることすらあります)と、以後は老中(ろうじゅう)となった定信の「寛政(かんせい)の改革」によって、庶民に平和が訪れるというストーリーがほとんどなのですが、この話って、本当のことなのでしょうか。

先述した綱吉の場合もそうですが、私たちは意識的につくられたイメージを頭から信じ込んで疑わ

なかつたり、あるいは始めから結論を意識したうえで行動を起こしたりすることが良くあります。

時と場合にもよりますが、こうした固定観念や先入観にこだわってはいは、歴史のみならず、あらゆる物事の真実をつかむことが難しくなるといえるでしょう。

一方、江戸時代後期の政治改革といえば、寛政の改革のみならず、定信と同じ老中の水野忠邦(みずのただくに)が行った「天保(てんぽう)の改革」も知られていますが、一般的には、同じ頃に江戸北町奉行として活躍した遠山景元(とおやまかげもと)の方が、水野よりも有名ですね。

遠山景元は「金四郎(きんしろう)」の別名から「遠山の金さん」としてその名が知られているほか、「水戸黄門(みとこうもん)」こと徳川光圀(とくがわみつくに)や、南町奉行の「大岡越前(おおおかえちぜん)」こと大岡忠相(おおおかただすけ)とともに、現代でも「正義の味方」ともてはやされることが多いです。

しかしながら、ドラマの中の「金さん」としてではなく、歴史上における「遠山景元」の実像に関しては、意外と知られていないのではないのでしょうか。

今回の講座では、田沼意次と松平定信のそれぞれの実像に迫ることで、二人のどちらが本当の悪役、いや「悪人」なのかを考えるとともに、遠山景元の波乱に満ちた生涯をたどりながら、天保の改革の真実や、その実行者である老中の水野と「金さん」との関係などについて探っていきたいと思います。

田沼意次は、享保(きょうほう)4 (1719) 年に、田沼意行(たぬまおきゆき)の長男として生まれました。田沼家は、元は紀州藩の足軽(あしがら、武士よりも下の身分の兵士)でしたが、紀州藩主だった徳川吉宗(とくがわよしむね)が幕府の8代将軍に就任した際に江戸に同行して、600石の旗本として取り立てられました。

意次は若い頃から、後に9代将軍となる吉宗の子の徳川家重(とくがわいえしげ)の小姓(こしょう、身の回りの世話をする役目のこと)に抜擢(ぼつてき)され、家重の信頼を受けるとともに、実力を買われて出世していききました。宝暦(ほうれき)元 (1751) 年には、家重の御側御用取次(おそばごようとりつぎ)に就任し、宝暦8 (1758) 年には1万石の大名となりました。

家重は宝暦10 (1760) 年に隠居して、子の徳川家治(とくがわいえはる)が10代将軍に就任しましたが、家重が「意次は優秀な人物だから引き続き用いるように」と家治に勧めたこともあって、意次は家治からも厚い信頼を受けました。

その後、明和(めいわ)4 (1767) 年に正式に側用人(そばようじん)となり、明和9 (1772) 年には老中(ろうじゅう)を兼任するまで出世を重ねたのみならず、石高(いそだか)も最終的に5万7,000石にまで増え、遠江(とおとうみ、現在の静岡県西部)の相良(さから)に新たに城を築きました。なお、意次が全盛期の頃は「田沼時代」と呼ばれています。

意次がここまで出世できたのは、二人の将軍に可愛がられたこともありますが、やはり彼自身の能

力が極めて高かったのが主な原因でしょう。では、その意次の実力とはどのようなものだったのでしょうか。

田沼意次の代名詞として今も語り継がれている言葉に、先述した「賄賂政治」があります。賄賂といえば、今では立派な犯罪行為であり、政治家が逮捕されることも珍しくありませんが、現代と同じ目で江戸時代の賄賂を見るということは、厳密に言えば正しくはありません。

実は、当時の江戸幕府で賄賂をもらうことは「むしろ当然」という感覚がありました。なぜなら、賄賂を受け取れば、それだけ賄賂を贈ってくる側の諸大名や商人の勢力を削(そ)ぐことができるからです。従って、幕府の権力を保つためという口実のもとに、意次以外の幕閣も積極的に賄賂をもらっていたのが現実の姿でした。

加えて、そもそも有力な政治家に対して金品を贈ることは、現代の法律で認められた「政治献金」も含めて、昔も今もある意味当然の感覚です。当時の幕閣の中で、意次に一番実力があると誰しもが思ったからこそ、彼に賄賂を贈っていたとも考えられます。ちなみに、清廉潔白(せいれんけっぱく、心が清くて私欲がなく、後ろ暗いところのないこと)で知られる松平定信も、幕閣入りを目指して意次にしきりに賄賂を贈っていたのは有名な話です。

さて、意次は、先述したように若い頃から徳川家重の小姓として仕えていましたが、8代将軍の徳川吉宗による重農主義の政治の結果によって、幕府の直轄地である天領(てんりょう)で一揆(いっき)が多発したのを間近で見っていました。

重農主義ではもはや幕府政治が機能しないということを悟った意次は、やがて政治の実権を握ると、現実的な重商主義に政治の姿勢を切り替えるとともに、開明的な政策を次々と実行していったのです。

2. 開明的だった田沼時代とその後の「悲劇」

意次がまず行ったのは、一年間の予算の編成でした。現代では当たり前の予算制度ですが、江戸幕府においては、それまでは必要な際に幕府の金蔵(かねぐら)から金銀を引き出していたのです。

このようないわゆる「ドンブリ勘定」を続けていては、いつまで経っても経費節減ができません。そこで、意次の時代になって初めて予算制度が成立したのですが、費用の割合はどうだったのでしょうか。

意次が自己の保身を図ろうとすれば、当然将軍家や大奥の費用を多めに計上すると思いますよね。ところが実際は全く逆であって、年を経るごとに減らされていきました。その一方で、町奉行などの民政に関する費用は据(す)え置かれていますから、結果としてかなりの経費削減に成功していることとなります。

本当に幕府のためになる政治を目指すのであれば、将軍家や大奥のご機嫌を取ることなく、思い切

った手段を実行する。意次の「政治家」としての優秀さがうかがえる政策の一つですね。

次に意次が行ったのは、重農主義から重商主義への思い切った改革でした。とはいえ、それまでの「儒教と商行為」の呪縛(じゅばく、心理的な強制で身動きできないこと)から脱出することは、そう簡単にはできません。

第 52 回歴史講座でも紹介しましたが、江戸幕府が公的な学問として採用した朱子学は、儒教に由来していました。

そして、その儒教でもっとも嫌われているのが、生産性が全くないうえに、「100 円の価値しかないものを 120 円で売る」という行為自体が「卑(いや)しい」と見なされ、道徳的に認められていなかった、いわゆる「商行為」でした。

幕府の政策において、商業は「悪」とみなされているといっても過言ではなく、商人がどれだけ利益を上げて、彼らから所得税や法人税を集めるという発想自体がなかったのですが、意次は商人から直接税を集めるのではなく、彼らが扱う商品に税をかけることによって、幕府の収入を積極的に増やそうと考えました。

田沼時代の頃までには、物品ごとに仕入れから販売までの独自のルートが確立されており、複数の同業の商人によって運営されていました。意次は、これら物品のルートごとに税を、すなわち物品ごとに流通税をかけることで、「儒教と商行為」の影響を和らげようとしたのです。

こうした発想の転換に対して、商人たちは「独占的に流通ルートを認めてくれるのなら」と、条件付きで税を支払うことに応じました。かくして、幕府と商人たちとの思惑が一致したことによって、営業の独占権を与えられた「株仲間(かぶなかま)」が、幕府の幅広い公認を受けることになりました。

株仲間が扱った商品は油や紙にロウソク、綿などの日用品や、銅や鉄などの金属が中心であり、江戸では十組問屋(とくみどんや)、大坂(現在の大阪)では二十四組問屋(にじゅうよくみどんや)が結成されました。

彼らから集められた運上(うんじょう)や冥加(みょうが)によって、幕府財政も潤(うるおい)、商業の繁栄が経済規模を全国的に拡大させるとともに、景気を上向させる要素にもなりました。

ところで、経済の発達には安定した通貨対策が欠かせませんが、その妨(さまた)げとなる要素が、この頃にはまだ残っていました。それは、東日本と西日本における基本通貨の違いです。

東日本では小判などの金貨が中心の「金遣(きんづかい)」であり、両(りょう)・分(ぶ)・朱(しゅ)といった単位で通用していたのに対して、西日本では銀貨が中心の「銀遣」で、しかも銀を貫(かん)や匁(もんめ)といった重さの単位で、量をはかって通用させる方法を採用していました。

このため、東西で取引を行おうと思えば両替をしなければならず、また金と銀との相場が必ずしも

一定しなかった（これを変動相場制といいます）ために、金銀交換の制約になっていました。

そこで、意次は明和 2（1765）年に明和五匁銀（めいわごもんめぎん）をつくり、実際の質や量に関係なく 5 匁の銀として通用させ、明和五匁銀を 12 枚、つまり 60 匁で金 1 両と交換できることとして、金と銀とを初めて一本化させましたが、残念ながらあまり流通せずに終わりました。

しかし、あきらめなかった意次は、明和 9（1772）年に南鐮式朱銀（なんりょうにしゅぎん）をつくり、朱という「金の単位をもつ銀貨」を流通させることに成功しました。南鐮式朱銀 8 枚が金 1 両と同じ価値となり、我が国での通貨の一本化がさらに進められることになったのです。なお、南鐮とは「上質の銀」という意味です。

重商主義を中心とする政策を進めていく一方で、意次は重農主義を完全にやめたわけではありませんでした。田沼時代にも新田開発は進められ、特に印旛沼（いんばぬま）や手賀沼（てがぬま）の干拓（かんたく）、海岸や河口、湖沼などを堤防で仕切り、内部の水を排除して陸地にすること）事業には、大坂の商人の資本を導入して積極的に行いました。

干拓事業の主な目的は新たな農地の開発でしたが、付近を流れる利根川（とねがわ）からの水路を開削（かいさく）して、江戸への物資輸送の近道を造ることも大きな目標でした。この事業が完成すれば、江戸と北方とを結ぶ船の航路の大幅な短縮が見込まれ、商品流通の活性化が期待されていましたが、無念にも天明（てんめい）6（1786）年に起きた大洪水によって、干拓は失敗に終わってしまいました。

一方、意次は長崎における貿易にも力をいれました。それまで縮小気味だった貿易の規模を拡大し、金銀を積極的に輸入するという、いわゆる外貨の獲得を目指したのです。しかし、輸入の量を増やそうと思えば、それに見合うだけの輸出量を確保しなければいけません。

そこで意次は、輸出品として国内で産出量が増えていた銅や、海産物としてイリコ（ナマコの腸を取り出して煮た後に乾燥させたもの）やホシアワビ（アワビの身を取り出して煮た後に乾燥させたもの）、フカノフレ（サメのヒレを乾燥させたもの）といった俵物（たわらもの）を使用しました。外貨の獲得のために特産物の増産をはかることも、重商主義による一つの成果といえます。

吉宗の時代に漢訳洋書（かんやくようしょ）が解禁されたことによって、西洋の様々な事情が少しずつ分かるようになっていきました。そんな中で、仙台藩の医者であった工藤平助（くどうへいすけ）が、北方に位置するロシアが南下を目指しており、将来我が国にとって災いとなる恐れがあること、また南下を防ぐ対策の一つとして、蝦夷地（えぞち、現在の北海道）の開発を行うべきであるという「赤蝦夷風説考（あかえぞふうせつこう）」を著しました。

意次は工藤平助の意見を採用して、それまで松前藩（まつまえはん）に経営を任せていた蝦夷地の直轄を計画しました。天明 5（1785）年には最上徳内（もがみとくない）らを蝦夷地に派遣して調査をさせ、その結果、当時の民間商人が蝦夷地のアイヌを通じてロシアと交易していたのを知ると、意次はこれらの交易も幕府の直轄にしようと考えました。

また意次は、アイヌの生活の向上を目指して、農作業を教えようとまで計画するなど、アイヌの自立も目指していました。これは、アイヌの生活を安定化させると、藩の財政を支えるサケや毛皮などをとって来なくなるからという、松前藩の身勝手な理由で農民化を禁止していたのとは、全く正反対の政策でした。

意次の蝦夷地に関する政策は実に開明的であり、またロシアとの交易も視野に入れていたという事実は、我が国の自主的な開国をうながしたことで、吉宗によってまかれたタネが、意次の政策で芽を出して成長し、大きな花を咲かせる可能性を期待させました。

田沼時代には、経済の成長によって我が国全体が豊かになり、様々な文化が各地に広まりました。例えば、我が国が世界に誇る美術である錦絵(にしきえ)の元祖である鈴木春信(すずきはるのぶ)は、浮世絵(うきよえ)版画による多色刷りを広めて、後の浮世絵の黄金時代の基礎となりました。

また、西洋医学の解剖書を訳した「解体新書(かいたいしんしょ)」が、前野良沢(まえのりょうたく)や杉田玄白(すぎたげんぱく)らによって完成されたのも、安永(あんえい)3(1774)年の田沼時代の頃ですし、エレキテルを復元するなど物理学の研究を進めた平賀源内(ひらがげんない)や、江戸時代の俳諧(はいかい)の巨匠の一人であり、画家でもあった与謝蕪村(よさぶそん)もこの頃の人物です。

これらのように、画期的かつ斬新な政治を行ったことで経済や文化を発展させ、幕府財政の好転をもたらした意次でしたが、政策の展開を苦々しい思いで見ている人物も少なくありませんでした。

彼らは、商人の力を借りることは恥であるとする「儒教と商行為」の呪縛から逃れられない人々や、元々は紀州藩の足輕に過ぎなかった家の男が老中まで出世しやがるとは何事だ、この「成り上がり者」めが、と意次を嫉妬(しと)の炎で見つめていた、旧来の身分の高い人々でした。

また、これとは別に、田沼時代の政権末期の頃までに、意次は庶民から大きな反発を受けていました。なぜそんなことになったのでしょうか。「賄賂の横行で政治が腐敗したからだ」と思いがちですが、実は、意次個人にその責任を負わせるには、あまりにも酷(こ)な「自然現象」が本当の理由だったのです。

田沼時代の頃の気象条件は小氷期(しょうひょうき)にあたり、気温が低いために作物が成長しにくくなっていましたが、よりによってそんな折の天明3(1783)年に、浅間山(あさまやま)が大噴火してしまいました。

しかも、噴き上げられた灰が成層圏(せいそうけん、対流圏の上にある高さ約10~50キロの大気層のこと)にまで達し、その後も長く留まって日光の照射の妨げになったことで、不作が助長されて大飢饉(だいききん)になってしまったのです。

この飢饉は、当時の年号から天明の大飢饉と呼ばれ、噴火以前の天明2(1782)年から天明8(1788)年まで長く続きました。

なお、浅間山と同じ年の1783（天明3）年には、アイスランドのラキ火山が同じように噴火しており、天明の大飢饉の理由の一つに数えられるとともに、北半球全体が冷害になったことで、1789（寛政元）年のフランス革命の遠因にまでなつたと考えられています。

天明の大飢饉によって、東北地方を中心におびただしい数の餓死者（がししゃ）が出てしまったほか、飢饉によって年貢が払えない農民による一揆や、都市部での米の売り惜しみに対する打ちこわしが多発しました。

そして、当時は「天災が起きるのは政治を行っている人間のせいである」という考えが信じられていたので、これらの責任の一切を意次が背負わなければならなかったのです。

一揆や打ちこわしが多発する殺伐（さつぱつ）とした世が続くなかで、意次の身にさらに悲劇が起きました。息子で若年寄（わかとしより）の田沼意知（たぬまおきとも）が、天明4（1784）年に江戸城内で襲撃を受けて死亡したのです。

意次の悲劇はさらに続き、後ろ盾（だて）となっていた将軍家治が天明6（1786）年に死去すると、政治に対する非難が殺到していた意次は老中を辞めさせられ、失意のうちに天明8（1788）年に亡くなりました。

そして、15歳で11代将軍となった徳川家斉（とくがわいえなり）を補佐するかたちで、意次にかわって天明7（1787）年に老中となったのが、松平定信だったのです。

3. 寛政の改革の様々な「弊害」

松平定信は、元々は御三卿（ごさんきょう）の田安家（たやすけ）の次男であり、吉宗の孫にあたることから、将軍の後継者となる可能性もあったのですが、複雑な事情の末に、白河藩（しらかわはん）の松平家の養子となりました。

定信は自分が他家の養子となって将軍後継の地位を失ったのは、当時の権力者であった意次のせいであると邪推（じゃすい、悪いほうに推測すること）し、個人的に深く恨んでいました。

そのこともあったからなのか、定信は自らが政治の実権を握ると、意次が幕府や我が国のために続けてきた様々な政策を、ことごとく打ち切りにしてしまったのです。

老中に就任した定信は、祖父にあたる徳川吉宗を理想とする様々な政策を行いました。彼の政治は「寛政の改革」と呼ばれていますが、その中心は徹底した緊縮財政をはじめとする、前政権の田沼時代の全否定でした。

例えば、意次による通貨統一の悲願が込められた南鐐式朱銀を発行停止にし、さらに蝦夷地の開発も中止してしまいました。ちなみに、これらの政策は定信が失脚した後に形を変えて再開されています。つまり、定信が打ち切りにした分だけ、幕府は無駄な時間と労力を浪費していることになり

ます。

また寛政 3 (1791) 年には、工藤平助と親交があった林子平(はやしへい)が、我が国における海岸防備の必要性を説いた「海国兵談(かいこくへいだん)」を著しましたが、定信は「世間を騒がす世迷言(よまいごと、わけの分からない言葉のこと)を言うな」とばかりに直ちに発禁処分にし、ご丁寧(ていねい)に版木(はんぎ)まで燃やしてしまいました。

海国兵談の出版がもし田沼時代であれば、意次はまず間違いなく子平の考えを支持したでしょう。だとすれば、我が国は現実より半世紀以上も前に開国し、幕末に黒船に迫られて、相手の言われるままに欠陥だらけの不平等条約を結ばずに済んだかもしれません。それを思えば、海国兵談の発禁処分は、定信による「痛恨の失政」でした。

また、定信は海国兵談の他にも、政治を風刺(ふうし)したり、批判したりする書物の発行を禁じるとともに、黄表紙(きびょうし)や洒落本(しゃれぼん)なども風俗を乱すという理由で発禁処分をしました。これらの命令は出版統制令と呼ばれています。

定信は、吉宗同様に庶民にまで厳しい儉約令を強制させました。先述した出版統制令などとあわせて、これらはせつかく田沼時代に花開いた町人文化の衰退を招いたほか、庶民の反発を呼ぶなど、経済的にも失政でした。

これらは、享保の改革の際と同じように、この時代に「寛政文化」と呼ばれるものが存在しない大きな原因となりましたが、その一方で、節約で浮いた町費(ちょうひ)の七割を積み立てさせ、江戸町会所(えどまちかいしょ)に運用させることで、飢饉の際などの非常時の貧民の救済に利用しました。これを七分積金(しちぶつみきん)といいます。

また、寛政の改革が始まった頃には天明の大飢饉がまだ続いており、庶民の暮らしは不安定になっていました。そこで、定信は飢饉に備えて各地に社倉(しゃそう)や義倉(ぎそう)をつくらせて、穀物を蓄(たくわ)えさせました。これを囲米(かこいまい)といいます。

この他、定信は現代の刑務所の原点ともいえる、無宿人(むしゅくにん)への職業訓練施設としての石川島人足寄場(いしかわじまにんそくよせば)を設置しましたが、これは定信自身の案ではなく、池波正太郎(いけなみしょうたろう)の小説「鬼平犯科帳(おにへいはんかちょう)」で有名な、火付盗賊改方(ひつけとうぞくあらためかた)の長谷川平蔵(はせがわへいぞう)が考えたものです。

定信による儉約令は、大名や旗本にも求められましたが、いくら儉約に励んでも彼らの借金は増える一方でした。そこで、定信は幕府の旗本や御家人の救済のために棄捐令(きえんれい)を出して、武士に金を貸していた札差(ふださし)からの借金を帳消しにしました。

しかし、棄捐令はいわゆる徳政令と同じ意味を持ちますから、旗本や御家人の収入を増やすといった抜本的な改革がない限り、結局は一時しのぎに過ぎないばかりでなく、再び借金をする際には、棄捐令で痛い目にあった札差から断られる可能性もあり、逆効果に終わってしまうという一面もあ

りました。

定信は田沼時代に進められた重商主義を徹底的に否定し、吉宗の時代よりも厳しい重農主義の政治を行いました。その中の一つに旧里帰農令(きゅうりきのうれい)があります。これは、地方から江戸に流れてきた農民を無理やり元の農村に帰すという法令ですが、そのままの政策で農村へ帰されたところで、待っているのは今までと同様の苦しい生活の日々でしかありません。

重農主義に戻すということは、吉宗の時代と同じく現実には不可能な「米本位制」を続けるということですから、いくら農村に帰したところで、いずれは再び江戸へ出て来ざるを得なくなるというわけです。かくして旧里帰農令は失敗に終わり、後の天保の改革の際に、同じような法令である「人返しの法」を出す結果になってしまいました。

定信は熱心な朱子学者でもありました。それゆえに自らが学んできた幕府公式の学問である朱子学を、幕府ゆかりの湯島聖堂(ゆしませいどう)で学ぶ唯一の学問とし、それ以外の学問を学ぶことを禁止しました。これを寛政異学の禁といいます。

寛政異学の禁によって、諸藩も幕府にならって朱子学のみを教えるようになったので、それ以外の学問、特に西洋の蘭学が衰退する原因となってしまいました。漢訳洋書の輸入を許可した吉宗の孫とは思えない愚策ぶりです。

ちなみに、湯島聖堂は定信が老中を退任した後の寛政9(1797)年に幕府の直営となり、昌平坂学問所(しょうへいざかがくもんしょ)と称されました。昌平坂学問所はもともと幕臣の子弟の教育所として発足しましたが、後に藩士や牢人(ろうにん)の受け入れも許したことで、全国からの英才を集めて活気にあふれました。

なお、昌平坂学問所は現在の東京大学の流れにつながるほか、明治以降に同じ場所に設立された東京師範学校や東京女子師範学校は、現在の筑波大学やお茶の水女子大学の源流となっています。

定信による寛政の改革は、理想主義者にありがちな性急かつ厳しすぎるものであり、多くの人々から反発を受けました。定信の周囲は目を追うごとに騒がしくなりましたが、そんな彼に止めを刺す事件が起きました。いわゆる「尊号一件(そんごういっけん)」のことです。

寛政の改革当時に在位されておられた光格(こうかく)天皇は、閑院宮家(かんいんのみやけ)からご即位されましたが、天皇の父君の閑院宮典仁親王(かんいんのみやすけひとしのう)のお立場が、禁中並公家諸法度(きんちゅうならびにくげしよはつど)の規定によって、摂関家(せつかんけ)より下となっていました。

このため、天皇の御尊父(ごそんぶ)が摂関家を目上にしなければならないという奇妙なことになっており、事態を重く見られた光格天皇は、父君に太上天皇(たいじょうてんのう、いわゆる上皇のこと)の尊号を贈られようと考えられました。

「皇位についていない皇族に尊号を贈る」というのは、鎌倉時代の後高倉院(ごたかくらいん)と室町時

代の後崇光院(ごすこういん)という先例が過去に2回もあり、特に問題はないだろうと思って朝廷側は幕府にお願いしたのですが、定信によって問答無用で拒否されてしまいました。

定信の拒否によって、光格天皇がご気分を害されるなど、これ以降の朝幕関係は微妙となり、また幕府への信頼が低下することによって天皇の権威が逆に高まり、幕末における討幕運動への遠因ともなっていました。つまり、尊号一件における定信の行動が、結果として幕府の運命を暗転させたのですが、そればかりでなく、定信自身が政権の座から転がり落ちるきっかけをもつくってしまいました。

11代将軍である徳川家斉は、吉宗が御三家と同じように「血のセーフティーネット」として、自身の血統から新たに設立した御三卿の一橋家(ひとつばしけ)の出身でした。

家斉は親孝行の思いから、父である一橋治済(ひとつばしはるさだ)に対して、前の将軍を意味する「大御所(おおごしよ)」の尊号を贈ろうと考えました。しかし、定信は朝廷に対して太上天皇の尊号を拒否した以上、治済に対しても同じように大御所の尊号を拒否せざるを得ませんでした。

このことで家斉は機嫌を損ねて定信と対立し、やがて寛政5(1793)年に定信は老中を辞めさせられてしまい、寛政の改革は約6年で幕を閉じました。なお、定信の失脚後も、老中の松平信明(まつだいらのぶあきら)らが「寛政の遺老(いろう)」として政治を行っています。

4. いま明かされる松平定信の「人間性」

これまで述べてきたように、松平定信による寛政の改革は成果らしい成果がなく終わったばかりか、朝廷との関係をこじれさせて討幕運動の引き金になったり、また開国の芽を摘(つ)み取ったことで、その後の黒船による大混乱を引き起こしたりするなど、どう考えても成功したとは言いがたい面がありました。

では、そんな定信がなぜ田沼意次を押しつけて老中にまで出世できたのでしょうか。定信は白河藩の藩主でもあります。多くの人が被害を受けた天明の大飢饉の際に、白河藩では「一人の餓死者も出さなかった」ということで、その政治ぶりが評価されたのも原因の一つです。

確かに餓死者が出なかったことは素晴らしいことかもしれません。しかし、大飢饉が続いていたうに、当時は鎖国と呼ばれた状態で大きな輸出入もできなかったのですから、国全体のコメの生産量が少ないことに何ら変わりはないのです。

そんな中で、一つの藩だけがコメを集めまくったら、他の藩のコメの流通量がますます少なくなりはしないでしょうか。また、定信によるコメの一方的な買い占めを、果たして幕府が黙って許可したでしょうか。

実は、定信の行為は「重大な法令違反」だったのです。

天明の大飢饉に際して、当時の政治の最高責任者であった田沼意次は積極的な対応を行いました。飢饉による被害をできるだけ小さくするために、凶作の地域でのコメの買い占めや売り惜しみをしないように命令したのです。

飢饉で生産量が減ったコメを可能な限り全国に分散して、凶作の地域での餓死者を一人でも減らそうとした意次の苦心の策だったのですが、そんな意次をあざ笑うかのように、定信は大坂の米市場に人を派遣してコメを買い占め、自分の領地まで運びました。

この結果、白河藩では確かに一人の餓死者も出ませんでしたでしたが、無理に買い占めに走った分、米価が異常につり上がってしまい、他の藩がコメを買えなかったこともあって、餓死者の数がさらに増えてしまいました。白河藩における「餓死者を一人も出さなかった」という成果は、他の藩やそこで暮らす多くの領民の犠牲の上に成り立っていたのです。

国内全体のことを一切考えず、自分が治める白河藩さえ良ければ「後はどうなってもかまわない」。このような人物のどこが「名君」だというのでしょうか。しかも、定信は意次を失脚させた後で、常識では考えられない酷(むご)い仕打ちを行っているのです。

老中の地位を追われた田沼意次が、失意のうちに天明 8 (1788) 年に死去すると、定信は意次亡き後の田沼家に対し、所領の 5 万 7,000 石を大名として最低クラスの 1 万石に減らしたうえで、遠江の相良から陸奥(むつ)へと強制的に移動させました。

しかも定信は、主(あるじ)がいなくなった相良城を、石垣ひとつに至るまで徹底的に破壊したのです。城というものは一度建てれば公有財産になりますから、普通はそんな無駄なことはしませんし、そもそも取り壊す費用も馬鹿になりません。

それなのに、なぜ定信はこんな暴挙を行ったのでしょうか。思い当たる理由としては、相良城が意次自身によって建てられた新しい城だったからであり、田沼家を追い出しただけでは飽(あ)き足らず、まさに「坊主憎けりや袈裟(けさ)まで憎い」とばかりに、意次の痕跡(こんせき)をこの世から抹消したかったからに違いありません。

定信は熱心な朱子学者でしたが、朱子学の由来は儒教にあります。すべてがそうであるとは限りませんが、儒教の信徒はネチネチとした陰湿で粘着質な性格を持っていることが多く、定信による信じられないような意趣返しも、その一環だといえるのです。

寛政の改革において、定信は「儒教と商行為」の呪縛(くわもく)にがんじがらめにされている自身に気付かず、商業を徹底的に排除し、農業を奨励する自らの思想を貫き通しました。その背景には「商人など不要だ。国には政治家と農民だけがいればいい」という極端な理想主義者としての本質(ほんしつ)がうかがえるのですが、実は 20 世紀の海外においても、定信とほぼ同じ考えを持つ政治家が存在しました。皆さんは誰かご存知ですか。

それはカンボジアのポル・ポトです。ポル・ポトは定信と同じく「国には政治家と農民だけがいれ

ばい」 という思想を持っており、そのために商人や教師、あるいは医者などのいわゆるインテリ層を次々と虐殺(ぎゃくさつ)しました。

この結果、人口 800 万人の国で約 200 万人がこの世から消えたとされています。ポル・ポトのように国民を虐殺したわけではありませんが、思想的には一致することから、定信は「元祖ポル・ポト」と呼ばれることもあります。

これまで述べてきたことを考えれば、田沼意次と松平定信のどちらが「名君」でどちらが「暗君」だったのかは言うまでもないでしょう。しかし、一般的な歴史の解釈においては全く逆の評価をされているようです。なぜこのようなことになっているのでしょうか。

意次は老中を追われてからわずか数年で亡くなり、自己の非難に対する弁解の機会が永久に失われてしまいました。一方、定信は老中を辞めさせられた後も、白河藩主として 30 年以上も生き続けて、その間に多くの著作を残すことで、田沼時代を徹底的に非難することができました。

さらに、幕府は身分による秩序を重視していたので、低い出自から成り上がった意次よりも、将軍吉宗の孫という血筋を持つ定信の主張を優先する傾向があり、加えて定信が幕府の公式学問である朱子学の優秀な学者であったことも、定信によって意図的につくられた意次の「悪人像」が、後世にまで残ってしまう原因となってしまったのです。

ところで、一時は意次による政治を激しく憎んだ庶民も、定信による寛政の改革が失敗したことで、後には田沼時代を懐かしみ、以下の狂歌(きょうか、日常を題材に洒落や風刺を盛り込んだ短歌のこと)を残しています。

「白河の 清きに魚(うお)の すみかねて もとの濁(にご)りの 田沼こひしき」

5. 大御所時代と大塩の乱

天明 7 (1787) 年に 15 歳で 11 代将軍に就任した徳川家斉でしたが、就任当初は老中の松平定信に政治の実権を奪われており、定信が寛政の改革の失敗によって失脚した後も、松平信明らの「寛政の遺老」が政治を行ったために、出る幕がありませんでした。

せっかく将軍になったというのに、長いあいだ政治の実権を持てなかった家斉でしたが、将軍にとってもう一つの重要な責務である「子孫を残す」ための時間には余裕があったことから、家斉は死去するまでに 50 人以上の子をもうけました。

やがて、文化(ぶんか)14 (1817) 年に松平信明が死去した頃から、自分の思いどおりの政治を行えるようになった家斉は、水野忠成(みずのただあきら)を老中にして、質の落とした貨幣を大量に流通させて、大奥の経費などを増大させました。

貨幣の質を落としたことで物価は上昇しましたが、同時に経済の活発化をもたらし、全体の金回りが良くなったことで好景気となり、後に「化政(かせい)文化」と呼ばれた華やかな文化が生まれることになりました。

天保 8 (1837) 年、家斉は将軍の地位を子の徳川家慶(とくがわいえよし)に譲りましたが、その後も大御所として政治の実権を握り続けました。家斉が活躍した時代は、別名を「大御所時代」、あるいは「大御所政治」とも呼ばれています。

大御所時代の頃までには、農村にも貨幣経済が浸透(しんとう)し、豪農や地主が力をつける一方で、没落した農民が耕作を放棄し、あるいは離村(りそん)することによって、荒廃地(こうはいち)が多く生じました。

また、江戸近辺の関東の農村は、もともと所領が複雑に入り組んでおり、無宿人(むしゅくにん)や博徒(ばくと)がはびこって治安が悪化しました。このため、家斉は文化 2 (1805) 年に関東取締出役(かんとりしまりしゅつやく、または「でやく」)を新設して、江戸周辺の警察機能を強化しました。

さらに文政(ぶんせい)10 (1827) 年には、幕府の直轄地や私領、あるいは寺社領を問わずに数十カ所の村々を組み合わせた寄場(よせば)組合を編成させて、農村の秩序を維持するとともに、地域の治安や風俗への対策を行いました。

なお、関東取締出役は関東の八つの国、すなわち八州(はっしゅう)をくまなく巡察したことから、別名を「八州廻(まわり)」とも呼ばれており、その活躍ぶりが、現代においても時代小説の題材としてよく取り上げられています。

田畑の荒廃地の増大が、年貢収入の減少にもつながったことから、幕府のみならず、諸藩にとっても深刻な財政危機をもたらしました。このため、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、藩主自らが陣頭指揮をとっての藩政改革が広く行われました。

改革の多くは農村の復興を主な目的として、新田を開発して年貢収入の増加を図ったり、地方の特産物の生産を奨励(しょうれい)して藩の専売制としたりしました。また、各地で藩校を創設して、新たな人材を積極的に育成しました。

改革に成功した各藩主は、名君として評判を集めることになりました。肥後の細川重賢(ほそかわしげたか)や、秋田の佐竹義和(さたけよしまさ)、あるいは米沢の上杉治憲(うえずぎはるのり、別名を鷹山=ようざん)らの名前を挙げる事が出来ます。

特に上杉治憲は、破綻(はたん)寸前であった米沢藩の財政を立て直したことでその名が広く知られており、藩主の座を後継者に譲った際の伝国(でんこく)の辞や、その際に贈ったとされる「生(な)せば生(な)る 成(な)さねば生(な)らぬ 何事(なにごと)も 生(な)らぬは人の 生(な)さぬ生(なり)けり」という歌が有名です。

なお、治憲の歌は「何事もやればできるし、やらなければ何も始まらない。何もできないのは自分がやらないからである」という意味です。必死になってやれば、出来ないことは何もない、ということですね。

1780年代に我が国を大いに悩ませた天明の大飢饉でしたが、その後は比較的天候に恵まれ、不作らしい不作が長いあいだ起きませんでした。しかし、将軍家斉の晩年期である天保4（1833）年頃からは凶作が続き、大規模な飢饉が再び我が国を襲いました。これを天保の大飢饉といいます。

飢饉によって、農村や都市部では貧窮者（ひんきゅうしゃ）があふれ返り、また追いつめられた農民や庶民らが、激しい一揆や商家に対する打ちこわしを続発させました。

このような全国的な大飢饉に対して、幕府や各藩は適切な救民対策を行うことはなく、逆に商家と結託してコメを買い占めることで、暴利をむさぼる行為が目立ちました。

「天下の台所」と呼ばれ、全国から様々な物資が集まるはずの大坂においても、容赦ない買い占め行為によってコメ不足となり、多くの人々が飢えに苦しみました。そんな様子を見かねた、大坂町奉行の与力（よりき）をかつて務めていた一人の男が、何度も窮状（きゅうじょう）を奉行所へ訴えましたが、幕府への点数稼ぎのために積極的に江戸へコメを回していた役人が、彼の献策に聞く耳を持つはずがありませんでした。

その元与力の男の名を、大塩平八郎（おおしおへいはちろう）といました。

陽明学を学んだ大塩は、与力を引退後に、私塾の洗心洞（せんしんどう）で門弟に教育を行っていましたが、窮民（きゅうみん）への救済をいつまでも行わない役人や豪商たちに激しい怒りを覚え、ついに武装蜂起（ぶそうほうき）することを決意しました。

大塩の決断には、陽明学における知行合一（ちこうごういつ）の精神、すなわち「知っていて行わないのは知らないことと同じだ」として、実践を重視する姿勢もあったからと考えられています。

大塩は反乱に向けて綿密に計画を練りましたが、決起直前になって内通者が出てしまい、計画は奉行所にばれてしまいました。大塩は準備不足のまま反乱を強行しましたが、奉行所によって半日で鎮圧され、大塩も一度は逃走したものの、約40日後に自害しました。

天保8（1837）年に起きたこの事件は、大塩の乱（あるいは「大塩平八郎の乱」）と呼ばれていますが、幕府の元役人が幕政を批判して反乱を起こしたという事実が、幕府のみならず、各方面に大きな衝撃を与えることになりました。

大塩の乱の後、全国各地で「大塩の門弟」などと名乗っての幕府への反乱が相次いで起きました。代表的なものとして、同じ天保8（1837）年に、越後（えちご）の柏崎（かしわざき）で国学者の生田万（いたよろず）が代官所を襲撃した生田万の乱があります。

また、大塩の考えに共鳴した農民による一揆も多発するなど、不穏(ふおん)な情勢がこの後も続くことになり、こうした事態を重く見た、幕府による綱紀肅正(こうきしゆくせい、国家の秩序やまた政治のあり方、または政治家や役人の態度を正すこと)のための改革をもたらしました。

しかし、困窮(こんきゆう)する庶民のためではなく、幕府の体面を保つことを何よりの目的とした改革が成功するはずもなく、遠からず破綻(はたん)する運命にあることは、むしろ当然ともいえました。

ちなみに、大塩が乱を起こした当時の大坂町奉行は跡部良弼(あとべよしすけ)でしたが、実は彼は幕府の老中の実弟でした。その老中こそが、天保の改革を行った水野忠邦なのです。

6. 時代劇「遠山の金さん」のストーリー

さて、いよいよ天保の改革について詳しく紹介していきますが、教科書でその名を見る機会は少ないものの、この改革に大きな影響を与えた人物こそが、江戸北町奉行の遠山景元、すなわち「遠山の金さん」でした。

「遠山の金さん」は、以前から映画やテレビ、あるいは歌舞伎などで何度も取り上げられている「正義の味方」ですが、このうち映画の世界では、片岡千恵蔵(かたおかちえぞう)主演の作品が特に有名です。

テレビ時代劇としては、昭和 45 (1970) 年に放送が始まった中村梅之助(なかむらうめのすけ)主演の「遠山の金さん捕物帳」が人気となり、その後に杉良太郎(すぎりょうたろう)が昭和 50 (1975) 年から「遠山の金さん」を演じたことで、金さんの人気はピークに達しました。

その他にも、市川段四郎(いちかわだんしろう)や橋幸夫(はしゆきお)、高橋英樹(たかはしひでき)や松方弘樹(まつかたひろき)に松平健(まつだいらけん)、さらには西郷輝彦(さいごうてるひこ)や里見浩太朗(さとみこうたろう)など、数多くの名優がこれまでに金さんを演じています。

さて、そんな「遠山の金さん」のストーリーですが、せっかくの機会ですので、その大まかな筋書きをこれから紹介したいと思います。

江戸北町奉行の遠山左衛門尉(さえもんのじょう)景元は、奉行としての務めの傍(かたわ)ら、しばしば町人に化けて江戸の町を練り歩いていた。

普段は気さくな遊び人として周囲からも親しまれていますが、いざ人殺しなどの大きな事件が起こると、被害者やその身边的人々に巧みに取り入って、事件の全容を次第につかんでいきます。そして、ついに姿を現した悪家老や悪徳商人、あるいは盗賊などが被害者を殺そうとする一歩手前で、着流し姿の金さんが颯爽(さっそう)と現れます。

「お前たちの悪行の数々、この金さんがすべて見せてもらったぜ！」

金さんがそう叫ぶと同時に片肌を脱ぐと、そこには見事な桜吹雪の刺青(いれずみ)が彫られています。そして「この金さんの桜吹雪、散らせるものなら散らしてみやがれ！」と金さんが啖呵(たんか)を切ると、襲い掛かる悪人から刀を奪い、峰を返して(=刃を逆に向けて)バツバツと悪人どもを痛めつけます。

ちなみにこの場合、刀の峰を返しているのです、悪人は斬られることはありません。これを「峰打ち」といいますが、刃と反対側の鉄の棒状のようなもので殴られるわけですから、実際には相当痛いはず(笑)。

さて、金さんがあらかた悪人どもをやっつけると、申し合わせたかのように北町の捕り方が現われて、うずくまっている悪人どもを召(め)し取りますが、その間に金さんはいずれともなく姿を消してしまいます。

ここで舞台は変わって、北町のお白州(しらす)となります。ちなみにお白州とは、今でいう裁判所の公判室のことです。

正装で威厳を正した北町奉行・遠山左衛門尉の目の前で、悪人どもは平然とシラを切ります。たまりかねた被害者が「金さんという人がすべてを知っています！」と訴えますが、悪人どもは「金さん？誰だそれは」「聞いたこともねえなあ」「本当にいるのなら、ここに連れて来いよ」と次々にはやしたてます。

言葉に詰まった被害者がうつむくと、悪人どもはますます調子づき、被害者のみならず奉行の遠山にまで毒づき始めました。このままではお白州が成り立たなくなってしまうと思われたその時！

それまで悪人どもの饒舌(じょうぜつ、やたらにしゃべること)を黙って聞いていた遠山が、急に大声で怒鳴り散らします。

「やかましいやい！」

何が起きたのかといぶかしげに見守る悪人どもを前に、遠山はさらに続けます。

「そうかいそうかい、お前らそんなに金さんが見たいのかい。その金さんはなあ、始めからここに座っているんだよ！」

遠山が啖呵(たんか)を切って片肌を脱ぐと、そこには目にも鮮やかな桜吹雪の刺青が！

「お前たち、これでもまだシラを切ろうってのかい！」

「あの時の金さんだ！」嬉しそうに叫ぶ被害者。まさか、という思いで呆気(あつけ)にとられる悪人ども。やがて身なりを整えた金さん、いや奉行の遠山が悪人どもに死罪などの厳しい裁きを言い渡すと、大抵の悪人どもはがっくりとうなだれますが、中には破れかぶれで遠山に襲いかかる者もい

ます。

しかし、遠山にあっさり一蹴されてしまい、逆上してわめき散らしながら追い出されるという惨めな最期を迎える悪人ども。すべてが終わった後、遠山は被害者にねぎらいの言葉をかけると、立ち上がって決め台詞を言います。

「これにて一件落着！」

以上が「遠山の金さん」の大まかなストーリーですが、まさに勧善懲悪を地で行く痛快なドラマであるといえますね。しかし、史実の金さん、いや遠山景元は本当にこんなお裁きを行っていたのでしょうか。もちろん答は「No」です。

そもそも江戸町奉行という職業は、江戸の町の政治や警察を担当し、裁判も行わなければならないという、現代でいえば東京都知事や警視総監、加えて裁判所の長官を兼任するという大変な激務であり、それゆえ在任中に死亡する奉行も多かったのです。そんな多忙を極める町奉行が、気軽に町中を一人で、しかも町人に化けて練り歩く時間的余裕があるとはとても思えません。

さらに、町奉行が事件の当事者として判決を下すということ自体が、本来は有り得ないのです。お白州で裁きを言い渡すということは、今でいう裁判官による判決の申し渡しにあたりますが、現代の法律では、刑事裁判で裁判官に予断(=結果を前もって判断すること)を与えないために、起訴状のみを提出してそれ以外の証拠を出してはならないことになっており、これを「起訴状一本主義」といいます。

これは、裁判官が事件について先入観を持たずに審理することで、中立公正な判断を行うことを意図して定められたものです(刑事訴訟法第256条6項)。

一方、金さんはドラマの世界で捜査や訴追(そつゐ、刑事裁判を行うよう訴えを起こすこと)だけでなく、裁判の全てを行っていることになりませんが、これでは被告人が有罪であるという先入観を持つことになるので、公平な判断など望めるはずがないのです。

そうなると思議なのは、遠山景元という実在の人物に、どうしてこのような「架空の物語」が創り出されたのか、ということですね。これには、史実における遠山景元が北町奉行として活躍していた、当時の時代背景が深く関わっているのです。

7. 水野忠邦や「妖怪」との対立

遠山景元は、寛政5(1793)年に旗本の遠山家に生まれましたが、当時の遠山家は複雑な事情を抱えていました。景元の父は、後に長崎奉行から勘定奉行を務めた遠山景晋(とおやまかげみち)ですが、景晋自身は遠山家に養子として迎えられていました。

ところが、景晋が養子として迎えられた後に、養父に男子(後の遠山景善=とおやまかげよし)が生まれた

ので、景晋は景善を自分の養子にしましたが、その手続きを済ませないうちに景元が生まれてしまったのです。このため、景晋は景元の出生届を一年以上遅らせることで、景善の養子届を先に済ませています。

こうした複雑な事情があったため、金四郎という通称を名乗った景元は、青年期を迎える頃までに家を飛び出し、放蕩無頼(ほうとうぶらい、勝手気ままに振る舞って品行の定まらないさまのこと)の生活を送っていたとされており、身体の刺青もこの時期に入れたと考えられています。ただ、景元が刺青を入れていた可能性が高いとされてはいますが、それが桜吹雪であったかどうかということについては確証がありません。

やがて、景善が景晋の隠居前に亡くなったことで、景元は遠山家に戻って家督を継ぐことになるのですが、青年期の町中での生活を通じて、世の中の様々な動き、つまり世情(せじょう)を知ったことよって、景元は江戸の庶民の考えが良く分かるようになっていました。この頃の経験が、後の景元にとって大いに役立つこととなります。

さて、家督を継いだ景元ですが、父の景晋が勘定奉行を務めたという経験や、自身の能力の高さもあって出世街道を歩み、天保 11 (1840) 年には、父の役職を超える北町奉行にまで昇進しました。

景元が北町奉行となった翌年の天保 12 (1841) 年、将軍退位後も大御所として政治の実権を握っていた 11 代将軍の徳川家斉が亡くなり、12 代将軍の徳川家慶の老中であつた、水野忠邦による政治が始まりました。

水野はかつての享保・寛政の両改革を手本とし、衰えつつあつた江戸幕府の権力強化を目指して天保の改革を行ったのですが、厳しい儉約令を中心とする改革の内容に対して、世情に通じていた景元は疑問を感じていました。

財政の支出を抑えるため、政府が儉約することは決して間違っていないのですが、それを一般庶民にまで強要してしまえば、消費が冷え込んで景気が悪化するばかりでなく、精神面でも余裕がなくなることで文化が衰退し、世の中全体が殺伐とした雰囲気となってしまうのが目に見えていたからです。そしてそれは、改革の実施によって現実のものとなってしまいました。

水野の押し進める改革に対して、北町奉行の景元や南町奉行の矢部定謙(やべさだのり)は何度も異議を唱えました。部下たちに自分の政策を否定されて面白くない水野は、景元を北町奉行の座から引きずりおろしたかったのですが、それは出来ませんでした。なぜなら、景元自身が優秀であり、将軍の家慶にも目をかけられていたからです。

徳川家の歴代の将軍は、一代に一度は町奉行・勘定奉行・寺社奉行のいわゆる三奉行による実際の裁判の様子を上覧(じょうらん、身分の高い人がご覧になること)するしきたりがありました。これを「公事上聴(くじじょうちよう)」といいます。

天保 12 (1841) 年に行われた公事上聴において、景元は将軍家慶からその裁判ぶりを激賞され、

奉行の模範とまで讃えられました。要するに、景元は将軍の「お墨付き」を与えられたのです。

これでは水野の力をもってしても、景元に対しておいそれと奉行職を罷免(ひめん、職務をやめさせること)できません。そこで水野は、景元にプレッシャーを与える意味も込めて、近いうちに「もう一人の奉行」に対して牙(きば)をむくこととなります。

先述したとおり、天保の改革は享保の改革や寛政の改革を手本としていましたが、それは時代にそぐわない重農主義の復活であり、幕府公認の学問であった朱子学に由来する儒教の精神から、商行為を極端に嫌うという一方的な思想がまかり通っていました。

天保の改革が始まった頃には、江戸をはじめとする大都市を中心に物価が値上がりしており、庶民の暮らしに大きな影響を与えていました。水野は、物価の値上がりは当時の流通システムを仕切っていた商人による株仲間にあるとして、天保 12 (1841) 年に彼らの解散を命じましたが、これはとんでもない誤解でした。

なぜなら、物価上昇の本当の原因は、人口が増えて消費量が増えた都会に対する、生産地からの物資の供給不足にあったからです。需要が増えているのに供給が不足すれば、物価が上がるのは当たり前です。従って、本当に物価を下げたいのであれば、大都市への供給量を増やす政策を採るべきなのです。

それなのに、株仲間を解散して、長年にわたる物資の流通システムを壊してしまえば、流通網が混乱して、かえって物価が値上がりするのは明らかでした。景元や南町奉行の矢部定謙は最後まで解散に反対しましたが、水野は商業を異常に蔑視(べっし)する自己の「腹心の部下」の勧めもあって、株仲間を強引に解散させてしまい、その結果、景元や矢部が心配したとおりに、物価がさらに上昇してしまっただけです。

株仲間の解散は、結果として大失敗だったのですが、水野や「その部下」は反省するどころか、自分たちに対して厳しく意見し続けた、南町奉行の矢部の失脚をはかりました。天保 13 (1842) 年、水野の「部下」が勝手にでっち上げた「無実の罪」によって、矢部は南町奉行を辞めさせられたばかりか、矢部家自体もお取り潰しになるという厳しい処分が下りました。

天保の改革に反対する有力者の一人である矢部に対する酷(むご)い仕打ちは、将軍の「お墨付き」をもらっているために処分できない景元など、他の反対派に対する「見せしめ」でもありました。この後、矢部は無実を訴える意味も込めて、お預けとなった家の屋敷で絶食を続け、壮絶な最期を遂げました。

株仲間を強引に解散し、矢部の罪をでっち上げて憤死(ふんし、激しい怒りのうちに死ぬこと)させた水野の「部下」こそが、当時は目付(めつけ、旗本・御家人を監察する役職のこと)であった鳥居耀蔵(とりいようぞう)でした。この後、鳥居は矢部の後を受けて南町奉行に就任して、水野の改革を忠実に行うこととなります。

ちなみに鳥居は養子で、本家は幕府お抱えの朱子学者である林大学頭(はやしだいがくのかみ)でした。要するに、鳥居はコチコチの「儒学者」であり、商行為や蘭学を徹底的に嫌うといった偏見の持ち主だったです。世の中の改革が求められる重要な時期に、このような政治家が幅を利かせていたことが、江戸幕府のみならず、我が国自体にも多大な影響を与えてしまいました。

ここで鳥居の「実績」を紹介しましょう。当時の幕府は、文化5(1808)年にイギリスの軍艦フェートン号が長崎に侵入して乱暴な行為を働き、長崎奉行が責任を取って切腹するという悲劇をもたらしたフェートン号事件を教訓として、いかなる外国船であっても追い返すという異国船打払令を文政8(1825)年に出していました。

天保8(1837)年、アメリカの商船(軍艦ではありません)であるモリソン号が、航海の途中で救助した我が国の漂流民の引渡しと、平和的な貿易の交渉を求めて来航しましたが、幕府は異国船打払令の規定どおりに問答無用で砲撃を行い、あわや撃沈(げきちん)されそうになったモリソン号は辛うじて脱出しました。この出来事をモリソン号事件といいます。

幕府による無茶な対外政策に、渡辺崋山(わたなべかざん)や高野長英(たかのちやうえい)らがそれぞれ書物を出して批判しましたが、天保10(1839)年に幕府によって弾圧されました。この事件を蛮社(ばんしゃ)の獄(ごく)といいます。この際に弾圧を指揮した人物こそが鳥居耀蔵だったのです。

このような人物が南町奉行となり、水野に認めてもらえるように改革を忠実に、いやそれ以上に厳しく実行すれば、江戸の庶民の暮らしはいいってどうなるのでしょうか。

なお、1840(天保11)年にアヘン戦争が勃発(ぼっぱつ)し、清がイギリスに敗れて香港(ホンコン)を奪われると、その事実を知って慌(あわ)てた幕府は、天保13(1842)年に天保の薪水(しんすい)給与令を出して、我が国を訪問した外国船に対し、食糧や燃料を与えて速やかに退去してもらうように方針を転換しています。

鳥居は熱心な儒学者にありがちな、理想主義に燃える一方で、蛇のようにしつこい粘着質な人物だったこともあり、水野の改革に逆らう者に対して、おとり捜査や密告によって陰湿に取り締まりました。

例えば、町に密偵を放って幕府の政治に対する悪口を言わせて、それに乗ってきた庶民を「幕府を批判した」と言って捕まえたり、儉約令によって禁止されていた絹の着物を着ている疑いがあると、往来の真ん中で女性を無理やり裸にしたりしました。

江戸の庶民は鳥居のことを当時の官職の「甲斐守(かいかみ)」と名前の「耀蔵」とをかけて「耀甲斐(ようかい)」、すなわち「妖怪」として恐れると同時に、鳥居のことを激しく恨むようになりました。

ところで、町奉行所は南北が同時に開いていたのではなく、一ヵ月毎に交代で業務を行っていました。南の月番(つきばん)の際には鳥居が厳しく取り締まったのに対して、北の月番の際には、水野の改

革の手法に異議を唱えていた景元が積極的に取り締まらなかったために、庶民の人气が自然と景元に集まるようになっていったのです。

8. 「金さん」伝説は永遠に

さて、天保の改革に苦しめられ続けた、当時の江戸庶民の数少ない楽しみとして、寄席(よせ、当時は落語以外の様々な興行も含んでいました)や歌舞伎がありました。しかし、これらの存在が世の風紀を乱すものであると一方的に解釈した水野は、たまたま歌舞伎の中村座が火事で消失した事故を奇貨として、寄席や歌舞伎を全廃するという方針を打ち出しました。

水野の方針を耳にした景元は、直ちに反対しました。若い頃から世情に通じていた景元にとって、庶民のささやかな娯楽である寄席や歌舞伎を廃止することは、絶対に認められなかったのです。

景元の意見に対して、将軍家慶も同調したこともあり、寄席は数を減らされたうえに興行の内容が制限され、また歌舞伎が当時は江戸の郊外だった浅草に強制的に移転させられたものの、それぞれ廃止を免れることができました。

江戸の庶民や、あるいは寄席や歌舞伎の関係者は、身体を張って自分たちのために力を尽くしてくれた景元に対して深く感謝しましたが、このことが、やがてひとつの大きな「効果」をもたらすこととなります。

水野による天保の改革は、庶民の声を無視してさらに続けられました。景元が批判的な態度を取り続けたことによって、なかなか思いどおりに行きませんでした。腹を立てた水野ですが、景元が事実上持っていた「将軍のお墨付き」がある以上はどうにもなりません。

水野は鳥居と相談した結果、景元に北町奉行を辞めさせるには「降格」とは限らないということで、天保 14 (1843) 年に、景元を町奉行より格上の大目付(おおめつけ)に「昇進」させることで、景元が改革に口出しできなくなるという目的を達成することが出来ました。

大目付は大名や朝廷などを監視して、謀反をさせないようにするという重要な役職でしたが、景元が就任した頃には閑職(かんしょく、重要でなくヒマな業務)と化しており、事実上の左遷(させん)でした。

邪魔者(じゃまもの)だった景元を遠ざけることに成功し、ほくそえんだ水野と鳥居でしたが、二人の仲には間もなく亀裂が入りました。同じ天保 14 (1843) 年、水野は江戸・大坂周辺の約 50 万石を幕府の直轄地にして、幕府の権力強化を図るために上知令(じょうちれい、または「あげちれい」)を出しましたが、これが大失敗だったのです。

上知令に反対する幕府の関係者からの反発を受けて、水野が老中を辞めさせられたことで、天保の改革は 2 年余りで失敗に終わったのですが、上知令の反対派の中に、何とあの鳥居がいたのです。

鳥居は上知令の計画を水野から聞いた際、その失敗を予測して、水野に協力するふりをしながら、

機密資料をすべて反対派に横流ししていました。こうした努力(?)の結果、水野が失脚した後も鳥居は南町奉行として残ったのですが、世の中はそんなに甘くはありませんでした。

翌天保 15 (1844) 年に、将軍家慶のお声がかりによって、水野が再び老中に返り咲いたのです。鳥居の裏切りに腹を立てていた水野の報復によって、鳥居は南町奉行を辞めさせられたのみならず、全財産を没収されたうえに、四国の丸亀藩(まるがめはん、現在の香川県丸亀市)にお預けの身となってしまいました。

この後、鳥居は明治維新を迎えるまで丸亀藩に閉じ込められていたのですが、晩年に江戸幕府が滅亡したことを聞くと、こう言ったそうです。

「ワシの言うことを聞かないから幕府が滅びたんだ」。

さて、大目付にさせられていた景元ですが、鳥居の失脚後の弘化(こうか)2 (1845) 年に、今度は南町奉行に就任しました。同じ人物が南北両方の町奉行を務めたのは、極めて異例なことでした。ちなみに、いくつかの時代劇で遠山の金さんが南町奉行としてお白州に登場している場面があるのは、こうした史実に由来しています。

景元は水野の後を受けて老中となった阿部正弘(あべまさひろ)からも信任を受けて、嘉永(かえい)5 (1852) 年まで約 7 年間も奉行職を務めた後に隠居すると、安政(あんせい)2 (1855) 年に 63 歳の波乱に満ちた生涯を閉じました。

天保の改革による幕府権力の強化を目標とし、そのためには江戸庶民の生活が犠牲となろうが問題にしなかった水野忠邦と、改革を忠実に実行するため、卑劣(ひれつ)なおとり捜査を平気で行った鳥居耀蔵に対し、庶民の生活を第一に考え、時には身体を張って水野の改革に反対する意志を貫き通した遠山景元。

こうした分かりやすい構図が誕生したことによって、現代に伝わる「名奉行遠山の金さん」の伝説の下地が出来上がったのですが、それをさらに後押ししたのが、かつて景元が守ってくれた恩を忘れなかった人々による「舞台」でした。

景元の死後、世は幕末となり、やがて明治時代を迎えましたが、将軍から激賞された有能な役人であり、庶民からも慕(した)われた景元の名声は、旧幕臣を中心とした多くの人々に残り、また景元が身体を張って廃止から守ってくれた寄席や歌舞伎の関係者たちの手によって、景元の、すなわち「金さん」の物語の基本が少しずつ形成されていきました。

そして明治 26 (1893) 年に、歌舞伎役者の初代市川左團次(いちかわさだんじ)によって上演された「遠山桜天保日記」が大評判となったことで、現代にもつながる「遠山の金さん」のイメージが次第に定着して、やがては時代小説や映画、さらにはテレビ時代劇へと派生していったのです。

世の中には架空の物語、すなわち「フィクション」と呼ばれるものが数多くありますが、だからと

いって、それらを完全に無視してしまっは、物事の全体像が見えてきません。今回の「遠山の金さん」の場合も、遠山景元という史実の江戸町奉行の活躍があったればこそ、現代に至るまで「金さん」の物語を楽しむことが出来るのです。

さらに付け加えれば、こうした考えは「金さん」に限らず、他の数多くの物語や、果ては神話の世界にまでたどり着くことができます。神話だからといって、はじめから相手にせずに無視するという愚かな行為は、何も生み出さないのみならず、我が国全体の歴史の喪失へとつながり、やがては国そのものが滅びる原因となってしまうのです。

ご先祖様からのかけがえのない宝物である、神話をはじめとした数々の物語を読むことで、私たちの先祖がそれぞれ一所懸命に暮らしてきたという事実を知ることができますし、またこれらの物語を次代に残すことによって、我が国の未来を永遠のものとする責務を、私たちが負っていることを忘れてはならないのです。(完)

主要参考文献：「逆説の日本史 15 近世改革編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379685>

「逆説の日本史 17 江戸成熟編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379687>

「日本の歴史 4 江戸篇」(著者：渡部昇一 出版：ワック)

YouTube 再生リスト「江戸後期の政治史」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML5x81WKxLCqjOjlxtaA-G5s>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>

※黒田裕樹の「百万人の歴史講座」でダウンロードできる全ての pdf (テキストファイル) は、黒田裕樹が著作権を持つ著作物であり、またその販売権は「南木倶楽部全国」を主催する南木隆治にあります。これらのファイルを第三者が再販売・不特定多数に対して再配布することはできません。